

くものいと No. 22

KUMO NO ITO

June 30, 1997

関西クモ研究会

くものいと22号目次

加村隆英： 大和葛城山（奈良県御所市）のクモ	1
吉田 真： 阿部茂さんを偲んで	3
西川喜朗： 錦三郎先生を偲んで	5
吉田 真： 草津良いところ、一度はおいで	7
年間行事の案内	10
榊元ともこ： わが家のかわいいミズグモ家族	11

大和葛城山 (奈良県御所市)のクモ

加村 隆英

昨年度(1996年)の採集会は奈良県御所市の大和葛城山で1996年6月9日、10月6日、1997年3月23日に行われました。3回の採集会で確認できた種の同定結果をここにまとめておきます。すでに「くものいと」21号に報告されている6月9日の結果(東條、1996)も再録しました。種名の後に採集月と確認されたステージ(♀、♂はそれぞれ成体、幼は幼体)を示します。

同定結果をお知らせくださった方々にお礼申し上げます。

ヒメグモ科

オオヒメグモ(6月:♀), ヤリグモ(10月:幼), ホシミドリヒメグモ(6月:♀;10月:幼), タカユヒメグモ(6月:♂, 幼), ヨロイヒメグモ(10月:♂;3月:♀, ♂)

サラグモ科

ザラアカムネグモ(10月:♀), ツリサラグモ(6月:♀, 幼), ムネグロサラグモ(6月:♀;10月:♀, 幼), アリマネグモ(10月:♀)

コガネグモ科

イシサワオニグモ(10月:幼), ヤマオニグモ(6月:幼), カラスゴミグモ(6月:幼), シロスジシヨウジョウグモ(10月:幼), ヤマシロオニグモ(6月:♀, 幼)

アシナガグモ科

オオシロカネグモ(6月:幼), キンヨウグモ(10月:♀, ♂)

タナグモ科

クサグモ(6月:幼), ヒメヤマヤチグモ(10月:♂), カミガタヤチグモ(10月:♀, ♂)

コモリグモ科

ハリゲコモリグモ(10月:♀)

フクログモ科

コムラウラシマグモ(10月:♀, ♂)

ワシグモ科

マエトビケムリグモ(10月:幼)

カニグモ科

コハナグモ (6月：♂, 幼), アマギエビスグモ (6月：♀), クマダハナグモ (6月：♀), ワカバグモ (6月：♀; 10月：幼), トラフカニグモ (10月：幼)

シボグモ科

シボグモ (10月：幼)

エビグモ科

シャコグモ (10月：幼)

アシダカグモ科

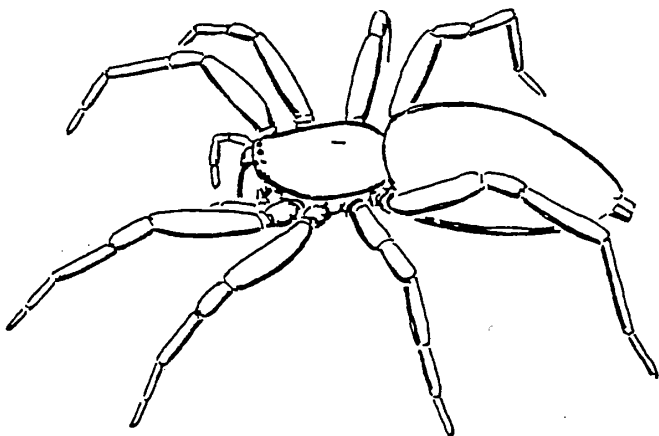
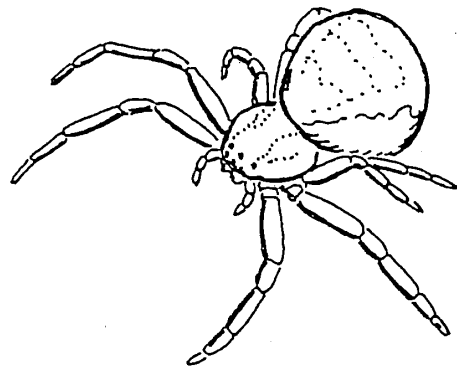
コアシダカグモ (10月：幼)

ハエトリグモ科

デーニッツハエトリ (10月：♀), ウススジハエトリ (10月：♂)

引用文献

東條清, 1996. 雨の日のクモ採集紀行. くものいと, (21) : 5-7.



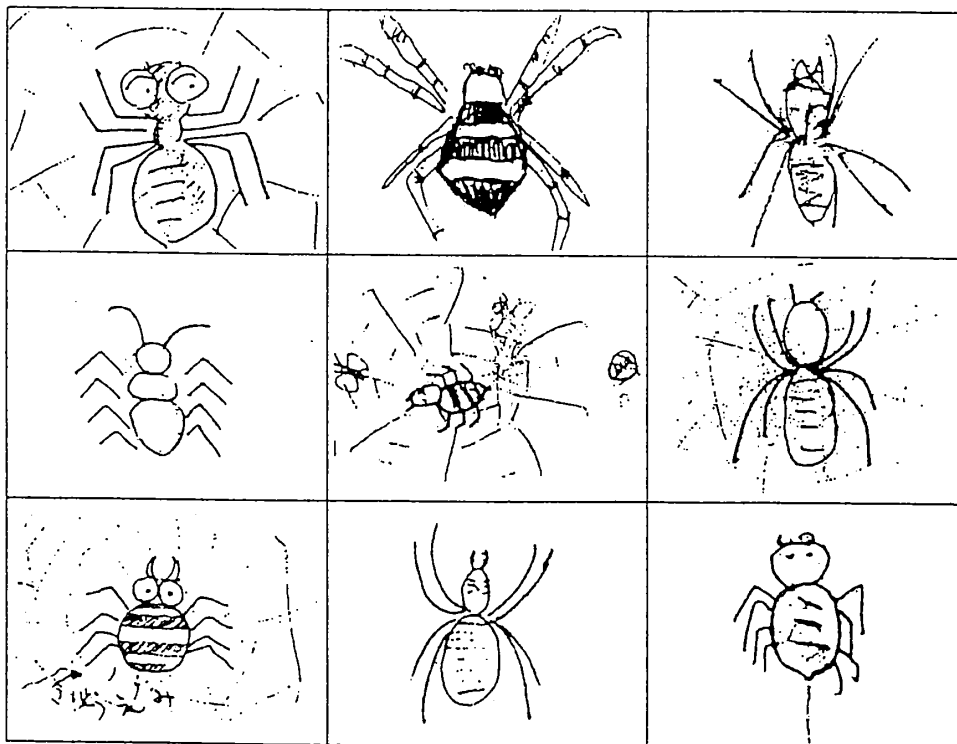
阿部茂さんを偲んで

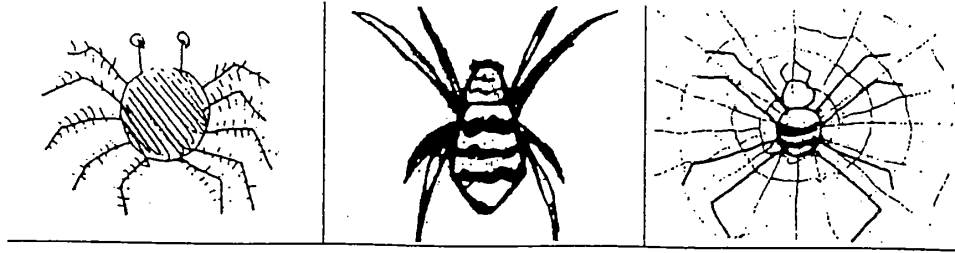
吉田 真

昨年3月、日本蜘蛛学会の会員である私や田中穂積さんは、学会員の近況調査のために、各学会員にアンケートを送っていた。このアンケートに対する奥さんの返事で、私は阿部さんが亡くなられたことを知ったのである。

私が始めてお会いしたのは、もう十数年も前のことであろうか、新潟で開かれた学会大会の席であった。山形県酒田市から来られたという。私も山形県出身なので、阿部さんとはなんとなくウマが合った。しわの多い真っ黒な顔。典型的なズーズー弁。人柄が偲ばれるおっとりとした話し方。

その後、学会の大会で何度かお会いした。阿部さんと話をすると、私は決まって故郷を思い出し、望郷の念に駆られたものだった。最後にお会いしたのは赤湯の大会であったろうか、主催者であった阿部さんは忙しそうで、あまりお話も聞けなかった記憶がある。



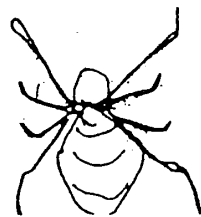


昨年の暮れごろに、奥さんから一冊の本が送られてきた。阿部さんが出版された『鳥海山麓の真正蜘蛛類たち』という本である。奥さんは「お邪魔でなかったらお側に置いてやってください」と添え書きをされていた。阿部さんが勤務されていた高等学校の研究紀要などに執筆されていたものをまとめて出版されたものらしい。

『糸さばきの小動物』『あでやかな小動物たち』『容器の網を作る小動物』『クモの傍目八目（おかめはちもく）』などは阿部さんが折々にクモや他の小動物、酒田の自然などについて随筆的に書かれたものであるが、読んでいると山形の自然が目の前に浮かぶ。鳥海山麓の真正クモ類（1-8）は、カバキコマチグモ、メガネドヨウグモ、ナガコガネグモなどこの山麓を代表するクモについて、その分布・生活史・行動などを詳しく調べたものである。そして巻末に、採集したおもな地名と目録として、19科97種が掲げられていた。

都道府県単位でみると、クモの調査は東京都などでは進んでいるが、あまり進んでいない府県も多い。このような中で、阿部さんのように長年にわたって調べ上げてきたこれらの記録は貴重である。

阿部さんのあのやさしいお顔がもう見られないのかと思うと、寂しい。心からそのご冥福を祈りたい。



錦三郎先生を偲んで

西川喜朗

空を飛ぶクモの研究で有名な錦三郎先生が、1997年5月8日に入院先の福島市の病院で亡くなりました。82才でした。

先生は1939年から絹状の糸が舞う「雪迎え（ゴッサマー）」に興味をもたれ、1950年代に入り、「雪迎え」の正体がクモの糸であることをつきとめられ（1951年10月31日）ました。その後、それらのクモの種類とその行動を、根気強い観察で次々と解明してゆかれました。

先生の著書の『蜘蛛百態』（自費出版：1964）、『飛行蜘蛛』（丸ノ内出版：1972）や『空を飛ぶクモ』（学研：1974）は、これらの飛行グモの生態・種類・その要因などを知るうえで、私たちクモ研究者にとっては貴重な科学読み物であります。

また、先生はアララギ派の歌人としても知られ、文学者、随筆家でもあります。『蜘蛛百態』で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞され、ほかに『浮遊する虫たち』や歌集『黄金時代』『白銀時代』などの文学作品の著書も多く、1975年には斎藤茂吉文化賞を受賞されました。

先生の雪迎への観察の舞台は山形県の米沢盆地で、先生のお宅の近くの南陽市赤湯の白竜湖周辺がいちばんのフィールドでした。私も一度、この白竜湖を訪れたことがありましたが、雪迎へは発見できませんでした。ヨシのような草の生い茂った白竜湖の泥炭地の沼の横で、何時間もしゃがみ込んでクモを見つめていた先生のお姿に敬服したこと、また沼に両足をつっこんでドロドロになったズボン姿でお宅に帰られたご様子に親しみを感じたことなどが思い出されます。やさしくもの静かで、かくしゃくとした先生でした。

錦先生が採集されたクモで新種記載されたものに、ウゼンマシラグモ、クリコホラヒメグモ、ニシキサラグモなどがあり、なかでもニシキサラグモ *Taranucnus nishikii* Yaginuma, 1972 (米沢市栗子洞産) は錦先生に献名されたものです。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

草津良いところ、一度はおいで

吉田 真

来年は草津市にある私の大学で日本蜘蛛学会の大会が開かれる。「滋賀県のクモはまだあまり分かっていないから、調べておこう」という西川さんの鶴の一声で、今年度の関西クモ研究会の観察会は滋賀県でやることになってしまった。いろいろと考えてはみたが、「JRか私鉄の沿線で、駅の近く」という条件を満たす採集地は思いつかない。仕方がないので、駅から車で採集地に移動することにした。

南草津の駅には、西川・加村・田中・山野・船曳の5人が集まっていた。姫路から来た船曳さんは、早く着きすぎて困ったらしい。なにせ、3年前にできたこの駅の前には、喫茶店すらないのである。

車に便乗して草津川の上流にある桐生のキャンプ場に向かう。ここなら、後ろに田上（たのかみ）山地をひかえ、水田や草地もあり、川も流れているから、クモもたくさんいるに違いない。

500円払って駐車場に車を止め、川辺で採集してみた。なかなか良さそうだが、一つだけ問題があった。やたらにウルシが多いのである。私はあまりかぶれる方ではないが、田中さんはびびりまくっていた。一番弱いヌルデでもだめらしい。そんなことでは、ツタウルシの多い北海道の山なぞ歩けませんぞ！

日曜日とあって、家族連れや若者たちがたくさん来て、水遊びやバーベキューを楽しんでいる。川はきれいに整備され、「オランダ堰堤」なるものが作られていた。

山道を登って、あちこちで採集する。これだけ人が多いと、「何をしてはるんですか？」と尋ねられるのが常であるが、滋賀県人は大人である。あまりそばに寄ってこない。ひょっとすると、あまりにも異様な我々の風体に恐れをなしているだけかもしれないが。こうもり傘に虫を落とし、吸虫管で吸っている私。食器の洗いカゴで落ち葉をこして、ヤッチャンを探している西川さん。地面にはいつくばって、コモリグモやワシグモを探している山野さん、田中さん、加村さん。世間の人から見れば、まさに「紙一重」のメンツかもしれない。

「あれ、西川教授じゃないですか！」と、子どもたちを引き連れたYMCAの

お兄さん。追手門学院大学の学生らしい。不特定多数の学生を教えていると、これが怖い。悪いことができない。どこで見られているのか分からないのだ。

みんなそれぞれに、まあまあの収穫があったが、田中さんだけが無然としている。思ったほどコモリグモが採れないらしい。「みんなが満足して帰る」のが採集会の理想である。駐車場まで戻って、車で他の場所を探す。集落付近の溜め池のあたりで、もう一度採集した。私はトガリオニグモを見つけ、田中さんも、キャンプ場では見つからなかったクロココモリグモやイモココモリグモを見つけたらしい。めでたし、めでたし。

最後にみんなで集まってざっとみたところでは、16科60種が確認された。以下にそのリストを示しておく。

ウズグモ科

ウズグモ

ユウレイグモ科

ユウレイグモ

サラグモ科

ムネグモサラグモ、ザラアカムネグモ？、ユノハマサラグモ

ヒメグモ科

ヒロハヒメグモ、オオヒメグモ、ヒメグモ、オナガグモ、バラギヒメグモ、アシプトヒメグモ

コガネグモ科

チュウガタコガネグモ、コガネグモsp.♂、ゴミグモ、サガオニグモ、ムツボシオニグモsp.、トガリオニグモ？、ヨツデゴミグモ、ヤマシロオニグモ、ハツリグモ

アシナガグモ科

アシナガグモ、ヤサガタアシナガグモ、オオシロカネグモ、コシロカネグモ、タニマノドヨウグモ、キララシロカネグモ、ウロコアシナガグモ

タナグモ科

クサグモ

キシダグモ科

イオウイロハシリグモ

くものいと

コモリグモ科

ウヅキコモリグモ, ヤマハリゲコモリグモ, ハリゲコモリグモ, イナダハリゲコモリグモ, キクヅキコモリグモ, クラークコモリグモ, クロココモリグモ, イモコモリグモ, チビコモリグモ

ササグモ科

ササグモ

フクログモ科

イタチグモ, ネコグモ

シボグモ科

シボグモ

ワシグモ科

フタホシテオノグモ, メキリグモsp., ケムリグモsp., マエトビケムリグモ

カニグモ科

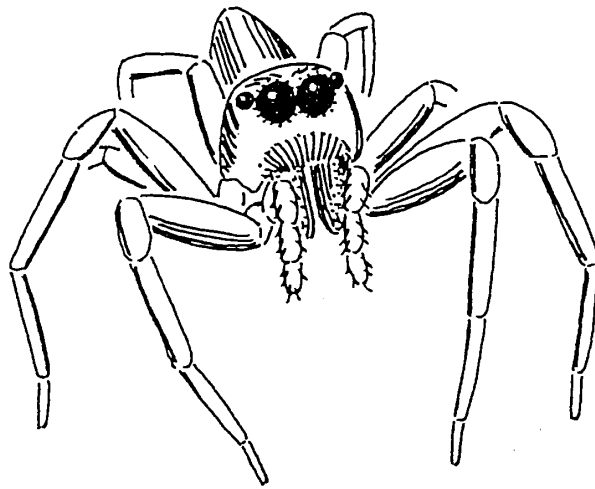
ワカバグモ, トラフカニグモsp., ヤミイロカニグモsp., コハナグモ, ハナグモ

エビグモ科

アサヒエビグモ, シャコグモ

ハエトリグモ科

デーニッツハエトリ, ヒメカラスハエトリ?, マミジロハエトリ, アオオビハエトリ, ネコハエトリ?, アサヒハエトリsp.♂♂, マミジロハエトリ



年間行事の案内

①採集会

(1) 第2回採集会

- ◆日時：10月5日（日）午前10時
- ◆集合場所：JR南草津駅前
- ◆採集場所：田上（たのかみ）山地
- ◆申し込み：南草津駅から車で移動しますので、申し込み制にします。参加される方は以下に申し込んで下さい。

吉田 真：〒525-77 滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学 理工学部 生物地球科学研究室
TEL 0775-61-2660 FAX 0775-61-2661
e-mail : myoshida@bkc.ritsumeit.ac.jp
自宅TEL/FAX 075-721-1743

(2) 第3回採集会

1998年3月21日（土）に予定。場所は未定。

②例会

12月14日（日）に四天王寺高校で行う予定。

わが家のかわいいミズグモ家族

柘元ともこ

今日は7月3日。気温31度、かなり蒸し暑い。今年もミズグモの夏越しに気を使う季節がやってきた。ただ今、わが家のミズグモ家族はアダルトメス4匹に子グモ9匹だ。メスのうち2匹は今年深泥池で採集した個体で、あとの2匹は昨年うちで生まれた子だ。子グモはうちで生まれたメスと、今年採集したオスを交尾させて生まれた子どもたちだ。産卵は5月30日。孵化を確認したのが6月17日で、3日後には子グモが分散しはじめた。22日に数を数えたところ、25匹が確認できた。それから日に日に数が減少し、結局9匹になってしまった（確認できている分だけ）。去年生まれた子も、このぐらいのペースで減っていたので、死亡率はこんなものなのだろう。

周りの人たちは子グモが共食いしているというが、私は共食いの現場を見ていないので、本当かな？と疑っている。同じぐらいの体の大きさを食べると、自分の身も危険になるからだ。もし共食いをしていたとしても、それは狭い飼育ビンの中ならではのことではないかと思う。野外ではもっと広く分散できるので、子グモ同士の接触も少ないのではないだろうか。でも、本当のところはぜんぜん分からない。

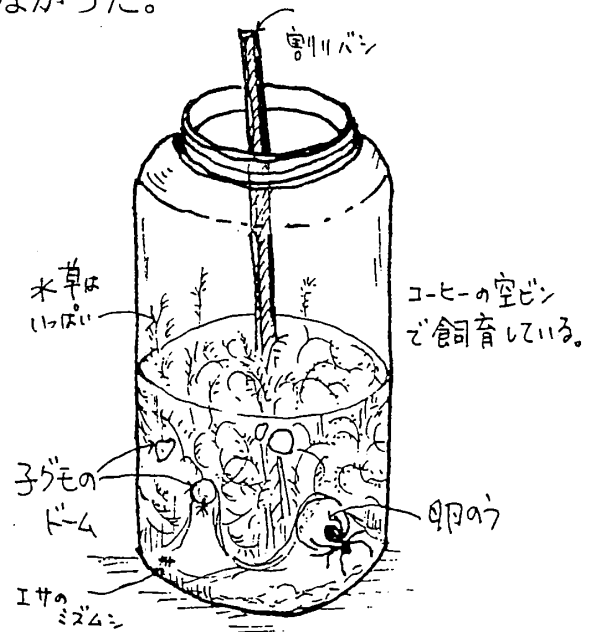
ルーペで子グモを見ていると、小さいながらも親と同じように水面に上がり、上手に後ろ足で空気を抱えてドームに運んでいる。いったい、一回にどれぐらいの量の空気が運べるのだろうか。微々たる量の空気を何度も何度も運び、ちゃんと泡のような空気ドームを作っている。本当に愛らしい。

アダルトメスのうち1匹は、いま卵囊を守っている。しかし、子グモが生まれるかどうかはわからない。6月24日にオスを入れたが、ドーム外では接触したものの、ドーム内での接触は見られなかった。メスは翌朝、卵囊を作っていたが、聞く話では交尾もドーム内で行われるというから、もしかしたらちゃんと交尾できていなかったかもしれない。とすると、無精卵の可能性が大きい（このオスは6月28日に死亡）。

無精卵といえば、クモのメスは交尾もしないのになぜ卵を生むのだろうか。今年深泥池から採集してきたメスの1匹がすぐに卵囊を作ったので、てっきり野外で交尾したものと思っていたが、結局無精卵だった。観察していると、産卵から20日たった日、このメスは卵囊とは別のところに新しい空気ドームを作って、そちらに移った。きっとこのとき卵をあきらめたのだろう。

無精卵はまだあった。実は、昨年5月1日に深泥池でアダルトで採集したメスが、今年4月30日に卵嚢を作った。このメスは去年3回産卵し、2度はちゃんと孵ったが、3回目は子グモの生まれた様子がなかった（のちに水槽の中に小さな子グモが2、3匹出てきたので、もしかしたらこの3回目の子どもかもしれない）。そのメスが、なんと4回目の卵嚢を作ったのだ。お尻の毛ははげて、空気も腹の方に少ししか付いていなくて、いつ死ぬのだろう、もう死ぬかもしれないといっているうちに卵嚢を作ったので、びっくりした。しかし、やはりこの卵嚢から子グモは孵らなかった。

産卵から20日後、このメスはくやしそうに自分の卵嚢の白い固まりを口で引きちぎり、くわえて離れた場所に捨てていた。破れた卵嚢から小さな卵がポロポロこぼれて、何だかとても悲しい光景だった。このメスはその後、だんだん水中から出ることが多くなり、6月4日にととうと死んでしまった。アダルトになって367日以上生きていたことになる。こんなことなら、もっと早くオスを採集してきて、交尾させてやればよかったと大いに後悔した。



卵嚢を作るには、けっこうエネルギーがいると思うのだが、クモはどうして無精卵を生むのだろうか。柘元（敏）は「よくあること」と言うが、私にはとっても不思議だ。野外でも頻繁に起こっているのだろうか。オスとメスはどれぐらいの頻度で出会っているのだろうか。オスとメスの出会いが困難な飼育下（1匹1匹分けて飼育している）ならではのことならば、私たちはミズグモにたいへん申し訳ないことをしているわけだ。そう思うとちょっと後ろめたい。

ミズグモを飼い始めて2年目。この間に何匹ものミズグモが死んでいった。だんだん慣れてくるとはいえ、どの子が死んでもやはり悲しい。初めは名前を付けていたが、よけい情が移るので、今年は名前を付けるのをやめてしまった。ミズグモは知れば知るほどお利口で、見れば見るほどかわいらしい。私には1匹1匹に個性さえ感じる。これからも、許される限り、この興味の尽きないミズグモを観察し続けたいと思っている。

<関西クモ研究会>

会長	山野 忠清
編集	吉田 真
庶務	加村 隆英
会計	河井 安子
顧問	西川 喜朗

くものいと 22号

発行年月日 : 1997年6月30日

発行者 : 関西クモ研究会 (代表 山野 忠清)

住所 : 〒567 大阪府茨木市西安威2-1-15
追手門学院大学 生物学研究室内 ☎ 0726-43-5421
(内線 5113 西川研: 5106 加村研)